

「聴こえない」高齢者の認知症と支援について

～「耳をふさぐ」だけでは分からない影響～

下垣ゼミ 小嶋 正人

1. 認知症のあるろう高齢者との出会い

認知症になると、記憶障害や見当識障害、判断力・思考力の低下などがおこり意思疎通がうまく図れないことがある。実習で、意思疎通がうまく図れないことによって、認知症のある高齢者が納得できていないにも関わらず不適切な対応がなされる現場を見た。また、講義で学びを深めるうちに、耳が聴こえる高齢者を前提とした認知症について学んでいるように思い、「耳の聴こえない高齢者が認知症になったときには意思疎通の図りにくさを含め、どのような状態になるのか」と、素朴な疑問を抱いた。

実習で、耳の聴こえない高齢者が生活している特別養護老人ホームで学ぶ機会をいただき、コミュニケーション方法を模索しながら耳の聴こえない高齢者とともに過ごす中で、耳の聴こえない高齢者は教育を受けた経験がない方がいるなど、それぞれ教育歴や成育歴が異なっていることが分かった。そのため、コミュニケーション手段も手話、身振り手振り、筆談など多様性に富んでいた。中には共通したコミュニケーション手段がないために、自分の伝えたいことも相手が伝えようとしていることもわからない方もおり、独特の意思疎通の図りにくさがあることを学ぶことができた。

そのような経緯から本論文では、耳の聴こえない高齢者が認知症になったときの、意思疎通の図りにくさを含め、抱えている困難さ、またその支援方法を明らかにすることを目的としている。なお、本論文では、耳の聴こえない高齢者を「ろう高齢者」とし、「生まれたときから聞こえない又は言語獲得期前に失聴した高齢者」と定義してい

る。

2. ろう高齢者と認知症について

まず、文献調査から「ろう高齢者」と「ろう高齢者が認知症になったときの变化・影響」を明らかにした。

(1) ろう高齢者について

1) 多様なコミュニケーション手段をもつ

近代的な聴覚障害児教育は1878年（明治11年）に京都盲啞院によって発足した（中野1991）。明治の聴覚障害児教育は、筆談と手話（手勢）中心の職業教育が行われたが大正から昭和にかけて口話式の教育法が推進され、1935年（昭和10年）ころには、聾啞学校教育の口話法体制が確立された（中野1991）。つまり、現在の高齢者が生まれた大正の終わりから昭和の初めにかけては、手話・筆談から口話法へと教育方法が変化した時期であった。そのため、学校教育では手話は禁止され口話教育が行われた。しかし、学校の寄宿舎では教師から隠れて手話で会話していた（坂本1991）ために、読唇などの口話法教育によるコミュニケーション手段だけではなく、手話など様々なコミュニケーション手段が生まれた。聾啞学校が義務教育ではなかった影響もあり、1936年（昭和11年）の聾児の就学率は46.7%であり（財団法人聴覚障害者教育福祉会1979）、当然教育を受けていない子どもは手話も読唇も知らず、身振りや手振り、指差し、などで意思疎通を図っていた。その影響で、現在のろう高齢者は多様なコミュニケーション手段を持ち、誰にでも通じる共通言語を持たない人もいることが明らか

になった。

2) 抽象的概念の理解のしにくさがある

脇中(2009)は、「9歳の壁」についての研究の中で、9歳を「具体物を離れ形式的・抽象的な操作を伴う思考や仮説演繹推理ができるようになる時期」と述べており、そこから「9歳の壁」とは目に見えない事象や物事について思考操作できるようになるかどうかの境目を示しているといえる。脇中の調査(2009)をもとに当時の聾児の就学率も鑑みて、約半数の聾児が9歳の壁を越えられずに、成長したことが明らかになった。その影響によって、現在のろう高齢者の中にも目に見えない抽象的概念の理解がしにくい、もしくはできない人がいるのである。

(2) ろう高齢者が認知症になったときの变化・影響

前述した、ろう高齢者の特徴は認知症になることによってより複雑になることが理解できた。

1) 限定されたコミュニケーション手段と不安感の増大

認知症になることで、記憶障害や見当識障害の影響から不安感を抱くことがある。その不安を取り除いてほしいために、時として他者に助言を求めたり、不安を訴えたりするのである。しかし、ろう高齢者のように多様なコミュニケーション手段を持ち、他人と意思疎通が図りにくい高齢者は、不安を抱えたまま孤立してしまうのである。そのために、不安感や行動・心理症状がより増大してしまうことが考えられる。

2) 抽象的概念の理解度の低下

認知症になることで判断力・理解力の低下も起こる。そして、目に見えない概念の理解のしにくさを持つろう高齢者にとって、認知症になることは、さらに理解度の低下を招くことを意味している。

3. 聞き取り調査

文献調査で明らかになったことを、実態を通して考え答えを導き出すために聞き取り調査を行っ

た。

(1) 調査対象及び調査項目

調査対象：入居者のほとんどがろう者である特別養護老人ホームの介護職員1名対して半構造化面接法を用い、聞き取り調査を実施した。後日、いただいた資料での文献調査も行った。

調査項目：「認知症のあるろう高齢者の行動・心理症状」、「抽象的な言葉の理解を進めるための支援方法」の大きく2点に分け、事例と支援方法をそれぞれ調査した。

(2) 倫理的配慮

介護職員に対し、調査やいただいた資料で得た情報は、卒業研究・卒業論文以外には使わないこと、また研究上情報を使用する際には個人が特定できないように匿名化して使用することを約束しインタビュー調査に協力していただいた。

4. 調査結果

インタビュー調査から、以下の4点の結果が得られた。

(1) 「ろう」であることが認知症に与える影響の小ささ

聴こえる高齢者でもろう高齢者でも認知症になることで、言葉の理解がしにくくなることは同じであるため、両者とも意思疎通の図りにくさは起こる。聴覚情報が欠落する「ろう」という状態が直接認知症に与える影響は小さいことが分かった。

(2) 「いつもと違う」視覚情報が落ち着きのなさをもたらす

ろう高齢者は生まれつき聴覚情報がない中で生活してきたため、視覚情報を主な判断材料として生活をしてきた。そのため、いつもと違う視覚情報があることによって不安になることや落ち着きがなくなることがあることが分かった。これは、認知症のあるろう高齢者は、聴覚情報がないという「ろうの直接的・1次的な状態」に影響されるのではなく、聴覚情報がない中で過ごしてきたた

めに視覚情報の影響力が大きいという「ろうの間接的・2次的な状態」に影響されていることが明らかになった。

(3) 抽象的な言葉の理解に必要な言葉・概念の土台形成

抽象的な言葉は目に見えないものを言い表している言葉であり、一つの抽象的な言葉を理解するために、それを構成している多くの言葉の知識を必要としている(例:「税金」「制度」等)。一方、教育を受けることができずいたことや、情報の入手が制限されることなどが影響し、ろう高齢者が持っている言葉の数は非常に少ないのが現状であった。そのために抽象的な言葉の理解ができない状況が生まれることが明らかになった。

そして、認知症のあるろう高齢者は、認知症の記憶障害が重なることで、言葉を獲得することもできにくくなるためにより一層の抽象的な言葉の理解のしにくさがあることが分かった。

(4) 認知症の発見を遅らせるコミュニケーションの困難さ

ろう高齢者の中には、コミュニケーション手段が指差しや身振り手振りであり、自分の言いたいことも相手の伝えたいことも理解しにくい人がいることはすでに述べた。身振り手振りなどは、本人がどのような意味を込めて表現しているかわからないために、言いたいことを読み取ることが難しい。そのために、認知症かどうかを判断するときに妄想があるかどうか、同じことを繰り返し言っているかどうか、などの言葉からの判断がついにくい。その結果認知症の発見が遅れてしまうことがあることが分かった。

5. 結論～目で見えない背景の理解と視覚情報を用いた支援の重要性～

本論文の結論として、聞き取り調査の結果をもとにろう高齢者が認知症になったときの問題・その支援方法を述べる。

(1) 認知症早期発見の難しさ

聞き取り調査の(4)にあるが、他者と意思疎通が図れないろう高齢者は言葉から認知症かどう

かを見極めることが非常に難しい。しかし、当然ろう高齢者だからと言って認知症の見極めが遅れてよいはずがない。今回の調査・研究では明確な支援方法を導き出すことはできなかったが、ろう高齢者の認知症早期発見の重要な点としては、「言葉ではなく行動に焦点を当てる」ことである。ろう高齢者の認知症の見極めに関して、記憶障害や妄想などの言葉として表現されるものではなく、夜中歩き回るようになった・興味を示す対象が変化した等の「行動」の変化に注意を向ける必要があるのではないかと考えられる。

(2) ろうの2次的な影響への支援方法

聞き取り調査で明らかになったようにろう高齢者の、視覚情報を中心に生活しているという「ろうの2次的な影響」に対する支援方法を3つの段階に分け、述べた。まず1つ目の「準備段階」では、当時のろう児たちが受けていた教育を理解し、ろう高齢者が生まれ育ってきた環境に関する知識を支援者が持ち理解することである。2つ目の「アセスメント段階」で、支援対象の成育歴や教育歴・コミュニケーション手段などをアセスメントし、支援者間に周知、支援方法を構築、そして3つ目の「ケア段階」で日常生活場面でのいつもと違う変化をなるべく少なくする。この3つの支援によって、ろう高齢者の周囲の環境変化がもたらす不安感や混乱を小さくすることができるようになると考えられる。

(3) 繰り返す言葉の土台作り

ろう高齢者が持っている言葉の数の少なさが抽象的な言葉の理解度に影響していることはすでに述べた。理解を進めるための支援は、より多くの言葉を絵や実物を示し説明し理解してもらうほかない。その際、より効果的に説明ができるように2つの要素を考えた。コミュニケーション手段を相手に合わせ、適切な説明者を選ぶことである。適切な説明者を選ぶとは、その言葉に関する知識を多く持っている人を選択する、との意味である。場合によっては看護師などの専門家が説明することで、その専門家が着ている独特の服装によって視覚的な印象が強くなり言葉の説得力が増すこ

とも考えられる。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、お忙しい中調査を引き受けていただいた特別養護老人ホームの職員と利用者の皆様に感謝申し上げます。また、聴覚障害についての学びのきっかけを与えてくださったサークルの先輩、学びの中で出会った仲間、ゼミの学生の皆さんありがとうございました。最後になりましたが、資料集めから執筆、卒業論文の過程すべてにご指導いただいた下垣先生、ありがとうございました。

参考文献

- ・「第2章 第1部 1. 教育制度から見た聴覚障害児教育の歴史と展望」中野善達：『新しい聴覚障害者像を求めて』『新しい聴覚障害者像を求めて』編集委員会、財団法人全日本聾唖連盟出版局、1991
- ・「第3章 2節 4. 手話を否定する口話法の台頭（大正時代）」：『聴覚障害児教育 これまでとこれから コミュニケーション論争・9歳の壁・障害認識を中心に』脇中起余子、北大路書房、2009
- ・「第4章 第2部 1. 流れの中で」坂本秀男：『新しい聴覚障害者像を求めて』